

雅 楽 だ よ り

目次

●上牧・鶺鴒ヨシ原 感謝の集いと交流会	1	●現代音楽の中の笙 (2)	9
●上牧実行組合 鶺鴒のヨシ原保存会へのメッセージ	2	音響分析と創作 清水チャートリー	
●この15年間の筆築用ヨシをめぐって	6	●芝祐靖先生の逝去を悼む (3) 佐藤浩司	11
鈴木治夫		●情報欄	14
●音楽とポリティカル・エコロジー	8	●訃報 社本正登司	16
寺内直子		●五節の舞の装束の再現	16
		●『近衛秀麿 亡命オーケストラの真実』	16
		第61号 2020年(令和2年)4月1日	
		発行 雅楽協議会	

『上牧・鶺鴒ヨシ原 感謝の集いと交流会』

2020年2月16日 於 本澄寺



上牧実行組合 組合長 伊藤昭三さんに感謝状を贈る大阪楽所の中川英男さん



鶺鴒のヨシ原保存会 会長 西村守さん



花束の贈呈



上牧実行組合の木村和男さん

雅楽で使用する管楽器の一つである筆築の蘆舌に使用するヨシは、古来より上牧・鶺鴒ヨシ原のヨシを使用してきました。筆築用ヨシを刈取られている地元の方々には、古来より私たちは大変お世話になってきています。またここ数十年、ヨシ原の環境の変化などにより筆築用のヨシが激減してきています。この変化の中でも地元の方々には筆築用のヨシを育てようとして苦勞されてきています。

そこで筆築の蘆舌の材料のヨシを守り続けてくださっている地元の方々に、まずお礼の気持ちを伝えたいと、ヨシ原焼き予定日の2月16日の午後「上牧・鶺鴒ヨシ原 感謝と交流の集い」を企画しました。

2月16日は残念ながら雨でヨシ原焼きは延期となりましたが会場としてお借りした上牧の本澄寺には、雨の中、地元の方々や雅楽関係者合わせて80名余の多くの方々にお集まりいただき開催しました。

まず本澄寺の副住職より一言いただきまして、続いて「雅楽だより」編集担当の鈴木治夫よりこの「感謝の集いと交流会」を開催するに至った経過や趣旨について、発言させていただきました。その中で上牧実行組合の木村和男さんからの話として、「雅楽の関係者が地元の方々には感謝状を贈るこのような集いは千年以上の歴史の中でも初めてのこと」と紹介もさせていただきました。

続いて、感謝の気持ちを込めて雅楽の演奏を天理大学雅楽部の方々により打ち物(鞆鼓、太鼓、鉦鼓) 絃(琵琶、箏) 管(笙、筆築、笛各3名)で「雑徳」と朗詠

「嘉辰」を演奏しました。(多くの雅楽関係者の方も演奏の準備をしてくださっておりました)が、学生さんのみの演奏となりましたことお詫びいたします。地元の方々には、雅楽関係者全員での演奏としてお聞きいただければと思います。

次に大阪楽所中川英男さんより、筆築用のヨシの保存と継承が雅楽にとつていかに大切であるかということ

を自分の体験を通して語られました。

そして地元の方々への感謝状の贈呈へと移り、感謝状を中川さんが読み上げて、メッセージ、署名、花束を添えて、上牧実行組合へは組合長 伊藤昭三さんへ、鶺鴒のヨシ原保存会へは会長 西村守さんへそれぞれ贈り



鶺鴒のヨシ原保存会に送った感謝状 実行組合に送った感謝状

ました。
感謝の言葉は、天王寺楽所雅亮会の前川隆哲参事よりも述べられました。

続いて地元でヨシ原を守り続けてきました上牧実行組合の伊藤組合長からは「感謝状をありがとうございます」とお礼を述べられ、鶴殿のヨシ原保存会の西村会長からは「ヨシ原を守っていくにはヨシ原焼きは重要です。その為にはお金も必要ですが知恵も必要です。私は今日の事を重く嬉しく思っています」とヨシ原を維持していく事のご苦労や、現状の問題点等も含め、いろいろとお話しいただきました。

地元の方のお話しの後、天理大学雅楽部総監督 佐藤浩司さんよりヨシ原とのかかわりなどの話をしていただきました。

次に筑波大学准教授の小幡谷英一さんよりは、筆簾用ヨシの研究も含め、ヨシの植生など研究者の意見を述べられました。最後に地元高槻市にお住まいで自然環境などにも関わられていらっしゃる大阪大学教授の深尾葉子



打物、絃も含めての天理大学雅楽部の演奏。

さんからも、自然環境の視点から見たヨシ原に関してのお話しをしていただきました。それぞれの方のお話の内容は、とても大切な内容でまた解決するには時間も必要な事ばかり、すべて今後の課題として残されたように思います。

10分ほどの休憩の後、雅楽の演奏をもう少しと地元の方々の希望もあり、再び天理大学雅楽部の皆さんに筆簾をメインにした演奏をしていただきました。

演奏の後、演奏を聞いての質問タイムとなり、またヨシ笛のグループの方も多く参加されており、ヨシ笛を吹くなど楽しい時間はあっという間に過ぎました。参加の方々か



雨の中会場に入り切らないほどお越しいただきました。

らいろいろなお発言もいただきました。予定の時間を超えて終了は4時過ぎとなりました。イスが足らなくなるほど多くの方々にお集まりいただくことができました。ほんとうにありがとうございます。

(当日の様子はユーチューブで見られます。「上牧・鶴殿ヨシ原 感謝の集いと交流会」で検索してください)

上牧実行組合・鶴殿のヨシ原保存会へ贈りましたメッセージを掲載します。

(五十音順)

○遠藤徹 東京学芸大学教授

雅楽の伝統を支えてくださり、本当にありがとうございます。

○大阪楽所 中川英男

雅楽は日本に伝来より千数百年の歴史があり、中でも筆簾は御神楽、唐楽、高麗楽、歌物など雅楽の全てに使われておりとても大切にされてきた楽器です。この筆簾の蘆舌は古来より上牧・鶴殿ヨシ原のヨシを使用しています。このヨシを守り伝えてきてくださいました皆様



より感謝しております。今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。

○音輪会

現在、世界中で地球温暖化をはじめとした、我々人類が原因で変わりつつある自然の姿。鶴殿のヨシ原も



2月16日 雨の上牧・鶴殿ヨシ原

その一つです。私たち雅楽を演奏する者は、このように当たり前に手に入れられている蘆舌がどんなにか地元の方々の方々の努力で保全されているのかを知り、その努力に感謝しなければなりません。そして、その努力に報いるために私達に出来ることは、自身の研鑽を怠りなく、聞く人の心に響く雅楽の演奏をする事だと思えます。これから先人から受け継いだこの伝統文化を継承する良きパートナーとして保全活動に携わって下さる方々に対し尊敬と感謝の念を持って演奏していきたいと思えます。ありがとうございます。これからもどうぞよろしくお願ひいたします。

○小幡谷英一筑波大学 生命環境系 准教授

生物学的、材料学的に見れば、鶴殿の葦は決して特別な葦ではありません。しかし、地域の方々が大切に守り、育て、活用してきた鶴殿の葦の「歴史」は何物にも代えがたいものです。その意味で、守るべきは葦そのものではなく、葦にまつわる地域の文化ではないかと思っています。



皆様のご尽力に深く敬意を表すると共に、これからも葦を含めた鶴殿の歴史や文化を守り続けて頂きたいと思えます。楽器用の葦を研究する者の一人として、何かしらお手伝いできればと思っております。

○雅楽道友会 福岡三朗

雅楽が伝えられて千年以上になりますが、筆簾の蘆舌のヨシは、このヨシ原で採取され

て来たのではないかと思います。昔からヨシ原を守られて来た地元の皆様には心より感謝いたします。最近に筆葉用ヨシが減ってきていると聞いています。私たちもお手伝いできることはさせて頂きますが、今後ともどうかよろしくお願いいたします。

○柏木岳史 宮城野音楽会

葦舌は筆葉の命。筆葉は吹き物の要。鶴殿の保全に尽力された活動に敬意を表します

○神奈川音楽部部長 北田智昭 部員一同

今まで千年以上伝えられてきた雅楽が、これからも千年以上続きますように。上牧実行組合様、鶴殿のヨシ原保存会様の御尽力に心から感謝申し上げます。

○加納 マリ

これまで地元の方がなされたことに、私も感謝の気持ちを表したく存じます。私も長い間、音楽大学で雅楽の授業を通して多くの学生さんたちに筆葉のことを伝えてきたつもりです。筆葉を演奏するまでには、多くの人の手を経ていること、特に舌（リード）は、ヨシを刈り入れてからも音が出るようになるまでには長い工程と時間がかかっていることなど。そして近年はそのヨシが減っていることも。地元の多くの方のおかげで、鶴殿の野焼きが続けられ、また、近隣に建設予定だったごみ焼却場も建設中止になるなど、ヨシにとつて喜ばしい報告をうれしく思っています。

今後、雅楽の存続のため、筆葉の良い演奏のため、ヨシ再生のための地元の皆さまのお力を応援したいと存じます。

○花舞鳥歌風遊月響音楽団

千年のちの日本人にも今とかわらない雅楽の音色を届けられるよう祈ります。皆様の御助力のおかげです。

こころから感謝申し上げます。

○上川雅楽会 鎌田友樹

北海道で雅楽の演奏をさせていただいています。筆葉のリードのヨシは減ってきていると聞いていますので、いつも心配はしておりました。2月16日ヨシ原にお伺いしなればと思っておりますが、なかなかありません。しかしヨシを刈り取っていただいている皆様には、心から感謝しております。遠いところでですので、直接のお手伝いは難しいのですが、感謝の気持ちでいっぱいです。筆葉のヨシを次の世代にもつなげていただければと思っておりますので、今後は出来る限りの事はさせて頂きたいと思っております。

○ケルン大学音楽学部講師 ケルン雅楽アンサンブル代表 志水芳郎

他国が最も興味をもつ世界へ発信できる日本文化は、そのサステイナビリティ（継続可能性）にあります。継続可能な文化の基盤となる環境維持が強く求められています。同ヨシ原保全は文化と環境にとつて世界的な資源です。上牧・鶴殿ヨシ原の保存維持に賛同いたします。



○佼成音楽会 会長 菅野泰正

佼成音楽会はお陰さまで本年創立70周年を迎えさせて頂きました。昭和25年、弊会の母体である立正佼成会の庭野日敬開祖が当

時宮内庁楽部楽長であった多忠朝先生とのご縁を頂戴し、忠朝先生より「伝統ある雅楽を後世に残していきたい。自分が指導するのて是非」と雅楽に対する情熱に感化され創立されたと同つております。

爾来、宮内庁楽部の先生方よりご指導を頂戴し今日がございますが、日本に雅楽が伝えられ一千年以上の歴史がある中で、それぞれの情熱が連続と受け継がれなければ、その伝統の灯が消えてしまっていたと思います。鶴殿の筆葉用のヨシ原も上牧実行組合様、鶴殿のヨシ原保存会の皆様のご苦労と情熱があつてこそと心より思わせて頂いております。そのご苦労に深く感謝し、心からの敬意を表します。

弊会と致しましても、鶴殿ヨシ原の保存に對しましては大きく心を寄せてまいる所存ですので、今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

○コロンビア大学雅楽アンサンブル学生

コロンビア大学雅楽アンサンブル講師
コロンビア大学中世日本研究所・日本文化戦略研究所 バーバラ・ルーシユ 青木健 米山朱実

日本国外でも感謝している人が多々あります。現地でご尽力の方々の励みになれば幸いです。

○境川楽所

鶴殿の蘆舌を守って頂き、ありがとうございます。

○社本正登司 ハワイ大学音楽学部雅楽コース講師

ハワイ大学で私が雅楽を教えるようになったのが1962年ですから、今年で58年目となりました。私をハワイ大学にと声をかけて下さったバーバラ・スミス氏は100歳になり現在も活躍しています。縁の下で私を支えてくれた私のワイフは亡くなりましたが、現在も私はハワイ大学の雅楽の授業を続けています。ただし現在、主に雅楽の指導をしているのは、私の娘となりました。

筆葉の蘆舌のヨシは、ハワイでもずっとお世話になっていきます。これからもハワイの雅楽も続けていきますので、どうか今後とも筆葉用ヨシをよろしくお願いいたします。

○鈴木治夫 「雅楽だより」編集担当

筆葉の蘆舌に上牧・鶴殿のヨシがいつの時代から使われ始めたかの資料は無いようですが、平安時代の中頃からと推測してても間違いではないかと思っております。長く伝え続けられ雅楽を支え続けているこのヨシ原は、雅楽にとつて「聖地」といえるでしょう。その筆葉用のヨシを守り伝え続けていただいている地元の方々には感謝の言葉しかありません。伝え続けられて来た雅楽を、これからも伝え続けていきますようお願いいたします。

○副島昌俊 元明治神宮神職

鶴殿のヨシと共に歩んだ私の筆葉人生五十年は、ヨシを大切に育てて下さる方々の存在なしでは語れません。神様様様に同じ人の心に感動を与えるあの不思議な音色は、真心の栽培があつてこ



そ表現されるものではないでしょうか。

これからも筆筆の音が人々の心を和らげ、絶えることなく響きわたることを願ってやみません。

○多度雅楽会 田中松緑

豊葦原の瑞徳国の音を、守り育ていただき、ありがとうございます。毎年、新しい子供達に伝える音が、永遠に同じ響きでありますように。

○田中直子

たくさんの人々の感謝の想いが、ヨシを守り育てて下さっている地元の方々やヨシに届きますように。

○中部日本雅楽連盟 羽塚尚明

ヨシ刈り 本当にご苦勞様です。会員一同ありがとうございました。

○筑紫楽所楽長 大賀信一郎

ヨシを刈り取っていただいている方々には、本当にありがとうございます。今後もしろしくお願いいたします。



○寺内直子 神戸大学 教授

鶴殿ヨシ原の保持のためのご尽力、深く感謝するとともに、心よりの敬意を表します。



音楽文化の維持には楽器あるいはその部品の安定した生産や供給が欠かせません。私は海外の音楽関係の学会にも所属しています。折しも、2021年に行われるある大会のテーマの一つは「Ecomusicologies and Ethnochoreologies (エコ音楽学、エコ舞踊学)」です。鶴殿の事例をきっかけに、日本でも音

楽文化とそれを取り巻く人的環境、物質的環境の議論が盛んになることを切に希望しています。

○天王寺楽所雅亮会 理事長 藤原憲

副理事長 小野真龍、薄沼善行

このたびの、上牧実行組合様、鶴殿のヨシ原保存会の皆様をお招きしての「感謝の集いと交流会」の開催をお喜び申し上げます。貴重な日本の文化財である「雅楽」の伝承に平素よりご貢献いただいている両団体の皆様に心より感謝の念を表するとともに、その機会をご準備いただいた関係者の皆様に御礼申し上げます。大阪に歴史的基盤をもつ当会としても、鶴殿ヨシ原の保存について大きな関心を寄せ続けていきたいと考えております。今後も雅楽界全体における支援ネットワークが広がることを念じております。



前川隆哲 天王寺楽所 雅亮会 参事

○天理大学雅楽部 総監督 佐藤浩司

学生時代、蘆舌は、神具店で購入していた。一本百円であった。大学食堂のラーメンが15円であったから、そう簡単に手に入れることができなかった。一本を大切に使った。ある先生から、「君のはブリキの舌だね」といわれてショックであった。大枚をはたいて数本購入したが、思うように鳴らなかつた。そのうち本部で蘆舌講習のお誘いを受け、習った。東京から来られたシノ先生であった。当初5人は受講していたが、



そのうち最後に残ったのは西尾さんと私であった。西尾さんは、メキメキと上達したが、私はさっぱりであった。それでも、刃物(中グリ)と鍔を購入、挑戦を始めた。この時、初めて蘆舌の大切さと難しさ、それ以上に、手に入れることの困難さを知った。蘆ならば何処でも良いというのではない。琵琶湖の周辺、木津川や大和川と当たっても、良い蘆が手には入らない。やはり鶴殿が一番だと分かった。

それにしても、蘆刈り、蘆焼きと、お世話取りお見守り頂く地元の皆様には、本当に感謝しかありません。誠に有難う御座います。今後ともよろしくお願いいたします。

○東儀秀樹 雅楽師



雅楽は日本の文化の根本的存在の一つであるばかりでなく、世界の音楽文化のルーツを示すとしても重要な文化です。それを継承し伝える役目を持つ日本は世界的に大きな誇りと責任を持つことになりました。それは基盤がしっかりしている上で胸を張れることです。その基盤のひとつに楽器の普遍性はとても重要な要素になります。先人たちが吟味を重ねて選び、構築した価値観も同時に守り抜いてこそその誇りと責任となります。そういう意味でも筆筆の蘆舌のヨシはとても大きな要を担っています。

雅楽のルーツが世界の楽器の道に関わった経緯を紐解けばわかることですが、この鶴殿のヨシ原は日本の文化の要に留まらず、世

界の音楽文化の要なのです。時代とともに変化する環境の中でなんとかこの文化と歴史を守ろうとする方々の気持ちには感謝の念に堪えません。私のような演奏家を始め、文化や歴史の研究者など全国の関心を持つ人の想いを背負い、理解していただき、こたわり、責任感を投じて下さる方々がいてこそこのような文化が継続できるのだとつくづく感じます。

これからも私はこのことを吹聴し、より多くの方々に理解をしてもらい、協力してもらえるよう努めていきたいと思えます。鶴殿のヨシ原に関わる方々の想いも織り込めながら筆筆の音を響かせ、感謝の気持ちとさせていただこうと思えます。

○徳野良裕

筆筆の蘆舌のヨシが生育するヨシ原は守らなければなりません。私は今は何も出来ないですが、気持ちは皆さんと同じです。ヨシを管理されている地元の皆様 本当にありがとうございます。

○中村香奈子 雅楽演奏家

千年のちも、草の声をきける豊かな民族性が受け継がれますように。環境を守って下さるご関係の皆様にごころから感謝申し上げます。

○南都楽所

今までも本当にありがとうございます。これからもよろしくお願いいたします。

○女人舞楽原笙会

皆様のご尽力のおかげで 私共も雅楽活動ができております。

心より感謝申し上げます。

○響雅楽会 本庄雅美

箏は雅楽に無くてはならない楽器です。箏にはヨシが無くてはなりません。ヨシがあるからこそ雅楽が伝えられてきています。そのヨシを守り育てていただいている地元の皆様には、大変なご苦勞をお願ひしています。本当に感謝の念に堪えません。敬意を表します。響雅楽会は北海道で活動しています。ヨシ原からは遠いので出来ることは少ないかもしれませんが、出来ることなら力になりたいと思っています。

○深尾葉子 大阪大学大学院 教授

悠久の歴史を受け継ぎ、悠る人々。その連綿とした生活と文化が、この国の自然や生き物を守り育てる。人々の魂に連なる音の源を今日まで伝えてこられたことに心からの感謝の気持ちと祈りを込めて。



○豊英秋 元宮内庁式部職楽部首席楽長

ヨシ原を守り、箏の葦を刈り取っていただいています。こと、大変なご苦勞がおりと思ひます。本当にありがとうございます。雅楽にとつて大切な箏の葦は、昔からこの上牧・鶴殿の地元の方々により管理され採取されてきました。地元の方々がおられなければ箏の葦はどのようなになっていたか想像できません。



本当にヨシ原を守っていただいていたことに心からの感謝の気持ちを表します。そし

てこれからも百年、千年と雅楽を末永くつづけていきますよう、私たちに出来ます事はお手伝いしたいと思っておりますので、今後ともどうかよろしく願ひいたします。

○平安雅楽会 理事長 中川平 会員一同

雅楽の音色を長年にわたり支えてくださっていた上牧実行組合、及び鶴殿ヨシ原保存会の皆様のご尽力に対し感謝を捧げますと同時に敬意を表します。

これからも未来に向け箏用のヨシの保存と再生ができます事ご祈念申し上げます。 ○宮田雅楽五音社

私たち宮田雅楽五音社(みやでんがくごおんしや)は、明治6年結成の雅楽団体です。箏の舌は欠かせないもので、鶴殿のヨシでつくられています。私は32年間お世話になっています。これからもずっとヨシを守っていつて下さるようお願い申し上げます。

○武蔵御嶽神社 伶人 秋山佳久

箏の葦のヨシは、宮内庁楽部の先生からも上牧・鶴殿のヨシが最高であると聞き及んでいます。昔から武蔵御嶽神社の祭典の時にはそのヨシを使わせていただいています。今後も神社の祭典には良い音色で奏奏をと思っております。今後ともどうかよろしく願ひいたします。

○明治神宮代々木雅楽会 柴田直宏

箏の葦は、葦舌の製作者から上牧・鶴殿のヨシ原のヨシを使用していると聞いています。近年は製作者の方もヨシの質が落ちてきていると話されています。とはいえヨシを刈り取る地元の方々のご足勞は大

変なことと推察しています。それに最近採れる本数も減ってきていると聞き及んでいます。採れる本数が減るとい事は、刈り取る方は以前に増して刈り取るための時間も増えてしまっているのだろうと思われます。出来上がった葦舌を手にながら、本当に地元の方々には頭が下がります。ありがとうございます。

○安富歩 東京大学 教授

雅楽は、人類が次世代の音楽を切り拓く上で不可欠の、世界に他の例のない貴重な音楽文化です。高槻の葦原は、この雅楽の命綱です。ここを守つて下さる皆様に感謝いたします。



○山下洋一郎

いつもありがとうございます。これから頑張ってください。

○洋遊会会長 上野慶夫

文化を支えるストラディバリウスと鶴殿のヨシ。世界文化遺産、雅楽は世界最古のオーケストラです。西洋のオーケストラの主旋律を奏するのはバイオリン、雅楽の主旋律は箏(ひりき)です。バイオリンには有名な「ストラディバリウス」という名器があります。同名の巨匠が製作したバイオリンです。箏で重要なのは楽器以上に葦舌、葦舌自体が名器です。



古来、箏奏者は葦舌を削って自分のストラディバリウスを作ってきたのです。た

だし、鶴殿のヨシでない」と求める音は出せませんでした。昔も今も、鶴殿のヨシは世界最古のオーケストラを支える名器です。存続と繁栄を切望します、日本文化のため

○横浜雅楽会 会員一同 代表会長 鈴木豪

貴組合・保存会の長年にわたる活動に敬意を表するとともに、深く感謝いたします。今年も鶴殿に素晴らしい葦が美しく靡き、令和の代に張りのある箏の音が響き渡りますように。

○伶楽舎 中村仁美

ヨシ原焼き、ヨシの刈り取りなどのご苦勞だけでなく、近頃ではつる草対策など気候や環境の変化への対応の仕方なども考えながらヨシ原の保全に努めていただき、大変感謝しております。昔から続く音を次の世代に伝えられるよう、何かご協力させていただくことができればと思っております。(メッセージ以外の署名団体 生駒雅楽会 大阪府神道青年会雅楽同好会 関西雅楽松風会 百済王神社 国立音楽大学 真宗大谷派大 阪楽僧温雅会 想像する伝統実行委員会 高 宮松風会 中日文化センター 天理教葛上分 教会雅楽部 天理教田無分教会雅楽会 成海 神社 名古屋雅楽会 融通念佛宗 楽融会 ほか 署名総数 約 1000名)



2月16日の会場 本澄寺

この15年間の筆築用ヨシをめぐって

「雅楽だより」編集担当 鈴木治夫
 今から15年前の2005年、大阪楽所の中川英男さんから「筆築の蘆舌のヨシが危ないから記事にして多くの人に知らせてください」という連絡があり現地を取材し「雅楽だより」第2号で、「筆築のリードのヨシの質が落ち、本数も少なくなつた」と上牧・鶴殿ヨシ原の報告記事を書きました。それから15年余りたちましたが、現在は当時よりさらに筆築用ヨシの質も落ち、本数も極端に少なくなり、今もお絶滅してしまうのではないかと言われるようになっていきます。

私は植物については全くの素人で詳しいことは分かりませんが、この15年余り筆築用ヨシについて現地を取材し、地元の方々の話を聞いたことなど、この15年余りの筆築用のヨシをめぐる動きをまとめてみました。

その中から分かった事は、ヨシに関わり始めた頃に私が「ヨシを増やしていけば、その中から筆築用ヨシも増えていくだろう」と思っていたことは間違いだったということでした。

ヨシを増やすために水を流しても、増えたヨシは筆築用のヨシにはならない。反対に水を増やすことは筆築用ヨシの生育を妨げてしまうということでした。私自身のこの間違いを認めていかないと次には進めませんし、筆築用ヨシを次の世代へ引き継いでいくことも出来ないという想いに至りました。
 なんとか筆築用ヨシを次の世代へもつな

げて行けるようにとの思いを込めて、以下にこの15年余りの動きを簡単に振り返り書いてみました。誤りの点もあるかもしれませんが、お教えください。ただ筆築用ヨシを増やしていくためのたたき台になればと思うのみです。

(1) 1971年の淀川河川工事により

筆築用ヨシの質が低下し始めた。

まず筆築用ヨシの質の低下はいつ頃から始まっているのかについて、元宮内庁楽部首席楽長東儀兼彦先生は2006年に「蘆の質が悪くなり、燻さなくては使い物にならないのではないかと話すことが多くなりまして・・・品質が悪くなつた蘆を見ては、淀川も河川工事で蘆が駄目になつたのかと嘆いておりました。また琵琶湖の蘆・茨城県瓜連の蘆・また利根川の蘆と試しましたが、やはり淀川の蘆に叶う品質ではありませんでした。」と書いています。宮内庁楽部の中でも20

年以上前にはヨシの質が悪くなつていることが話題になり、何か対応がないかと案じられていたことが判ります。(2006年「鶴殿を思う」鶴殿クラブ会報、及び「雅楽だより」15号2008年10月号より)

東儀兼彦先生の話す淀川の河川改修工事とは、淀川の川底を3〜4m掘り下げ、かつ低水路幅(平常時に水の流れている部分の幅)を120m程だつたものを300mに拡幅する1971年から始まる大工事で、これにより上牧・鶴殿のヨシ原の水面も3〜4m下がり、ヨシ原と淀川の水面の高低差3.5mが7m余りとなり、ヨシ原の環境が大きく変わ

っていきました。この頃から筆築用蘆舌のヨシの材質が悪くなつていったようです。

たしかに国土交通省淀川河川事務所淀川環境委員会の資料によりましてもそのことがはっきりと数字で表されています。1971年の淀川の河川工事前は、鶴殿ヨシ原の河川敷の80%がヨシ原だったが、1974年にはヨシ原は20%に激減し、さらに1982年には5%とまで減り続けたと記しています。2014年は導水路などによつて17%となつたと記しています。(2018年の資料が無いので不明ですが、つる草や雑草などが増えて、また一桁台になつてしまつていのではないかと考えられます)

(2) 国土交通省河川事務所・

淀川環境委員会などの取組

ヨシを増やすために

とられた方策だが

1971年の河川工事によりヨシが激減していく中、高槻市、国土交通省淀川河川事務所、淀川環境委員会などによるヨシ原の回復の取組について振り返ってみます。

高槻市は1975年、淀川の河川工事より4年後に「最近のヨシは茎が細く背が低い、ほとんど質が悪くなつている、どうにかならないか」と植物生態学が専門で大阪市立大学付属植物園に勤めていた小山弘道氏に自然保護相談員として鶴殿の調査を依頼して、鶴殿のヨシの調査を始めました。

調査を始めて14年後、1996年から、建設省(現国土交通省)淀川河川事務所は、ヨシの再生へ向けて以下の3つの対策を立てま

した。

その一つは「ヨシの再生には、水がかかさない。ヨシ原に水を送るため、淀川の水をくみ上げて水路を作りヨシ原に流す」というものです。1996年に初めて導水ポンプが設置され、2年後の1998年にはポンプの性能を上げ2秒間に1tの水をヨシ原に送る様になりました。(「雅楽だより」25号11頁、12頁2010年7月)

2番目には「ヨシを水に近づける方法(淀川の水位が下がった分だけヨシ原を掘り下げて淀川の水位に近づける)も行われ始めました。

さらに3番目には「良質なヨシの地下茎を、ヨシが生えていない所に移植して新たなヨシを創出する方法」も試みられました。

これらの3つの方法のその後について環境委員会の報告書では、3つの方法のどれもが「ヨシの回復にはつながらない」と報告されているのです。この報告書を読んだ時はとてもショックでした。

1番目のヨシ原に水を送る導水路の方法については、導水を始めて13年後の2009年の淀川環境委員会の報告に「水条件の改善のみではヨシ群落への回復は難しいことが判つた」(第24回淀川環境委員会陸域環境部会鶴殿保全フォローアップWG1-28)、2010年には「導水対策を行ってきたが、その効果は十分ではなくヨシ群落の生育範囲はきわめて限定された状況にある」(第26回淀川環境委員会 報告)と報告されています。
 2番目の切り下げの方法については、切り

下げより11年後の2009年の報告で「大半はオギ群落となっており、(中略)秋季にはヨシ群落が消失」「ヨシ群落面積が減少し、秋季はヨシ群落面積が0となり」さらに「筆葉の蘆舌の材料となるヨシなど、鶴殿の歴史文化を特徴付けるヨシは既存のヨシ群落に限られて生育」と報告されています。(2009年3月 第24回淀川環境委員会)

「ヨシ群落は0」「筆葉用ヨシは今までの所のみ」と切り下げをしても増えていないと記しています。(この切り下げは2019年現在も下流側で続いていて切り下げ地が拡大しています。現在は細いヨシが生えています)

3番目の良質なヨシの地下茎を移植する方法は「ツル植物の繁茂が著しい」(2006年第19回淀川環境委員会)「ヨシの回復状況が不良」(2008年第22回環境委員会)とヨシが減ってつる草が増えたという報告が続きます。そしてヨシの地下茎が採取された地は、ヨシ原に戻る事は無かったです。今までヨシ原だった地から、ヨシの根を取り除いてしまったのでヨシが生えなくなりました。

この3つの方法は「報告書」を読む限りでもヨシを増やす効果は出ていない。現地ヨシ原を見てもヨシが増えている様子は見られないし、まして筆葉用ヨシは年々減少して来

た。
(環境委員会の報告書については「雅楽だより」35号2013年10月号に詳しく掲載しています)

(3)新名神高速道路の着工と
NEXCO西日本・

「鶴殿ヨシ原の検討会」の結論

2012年4月6日、上牧・鶴殿ヨシ原を横断する新名神高速道路建設の閣議決定がなされました。これ以上ヨシ原に何かの手が加わると、さらに筆葉用ヨシの材質が悪くなるのではないかという危惧から、高速道路建設の見直しを求める署名活動も行われ合計10万筆余の署名が集まりました。しかし、高速道路建設の見直しは実現せず、工事を請け負った西日本高速道路株式会社(NEXCO西日本)は、会社の中に学識者6名、オブザーバー(団体及び個人)、事業者による「新名神高速道路 鶴殿ヨシ原の環境保全に関する検討会」(以下「検討会」)を2013年1月10日に設置し、2017年5月17日までの4年半の間に9回開催しました。私は毎回大阪に行き「検討会」を傍聴し、検討された内容とその都度「雅楽だより」に書くようにいたしました。

「検討会」は、2017年10月『鶴殿ヨシ原における植物調査に関する報告書』(A4判130頁 以下『報告書』)として調査・検討した内容をまとめ冊子として発行しました。

(この『報告書』はNEXCO西日本のホームページより、事業案内「鶴殿ヨシ原」報告書 と順に検索すると読めます)

この『報告書』の「第4章 事業による筆葉用ヨシへの影響の把握」4-10「第5章 筆葉用ヨシの保全と新名神高速

道路事業の両立に向けた提言」5-8 による

○「鶴殿では、陸域のヨシが、水域のヨシに比べて生育がよい」

○「導水路に生えているヨシは茎が太くても厚みがなく、もろくて割れやすいため、筆葉用ヨシとしては採取していない」

○「筆葉用ヨシの採取エリアは通水により冠水しない微高地のオギ・ヨシ群落である」

○「筆葉用ヨシの採取エリアのヨシの根系への水分補給は雨水が主体的である」

○「筆葉用ヨシは遺伝的要因で決定しない」これ等をまとめると、

(1)導水路及び導水路近辺のヨシは、筆葉用ヨシには使えない。

(『報告書』の表現は、「導水路に生えているヨシは茎が太くても厚みがなく、もろくて割れやすいため、筆葉用ヨシとしては採取していない」)

(2)鶴殿では、陸域のヨシが、水域のヨシに比べて生育が良い。

(3)筆葉用ヨシは、導水路から離れた少し高いところに生えている。

(4)筆葉用ヨシの水分の供給は、雨水がほとんどである。

(5)筆葉用ヨシは、ヨシの遺伝的要因(DNA)は関係なく、生育環境によって育つ。

そして『報告書』の「おわりに」(6-1頁)には、雑草やつる草などが増えることについて言及し次のように記しています。

「治水上の観点で一般的な河川で行われている河床整備により、河川流量が安定化する

ことは、自然環境においては、河川敷の冠水頻度の減少により侵入植物が増加し、植生の変化を招く場合がある。鶴殿ヨシ原においても例外ではなく、ヨシ原焼き等の取組みにより現況植生の維持を図っているが、つる植物や外来植物の侵入が顕著となっており、その保全の妨げとなる可能性がある」と。

言い回しが分かりにくいので、私なりに読みかえると

「1971年の河川工事により洪水などが減り、環境が変わったので、ヨシ原に草や雑草などが増えていった。だから筆葉用ヨシが減る。ヨシ原焼きなどだけでは現況を維持することは出来ない。今後はつる草や雑草などを取り除く必要がある。そのような対処をしないと筆葉用ヨシを保全していくことはできない」となるかと思えます。

「検討会」の内容を再度まとめると、筆葉用ヨシは、導水路の中や近辺、水の多い所(水域)では育たない。筆葉用ヨシは水分の供給は雨水で大丈夫で、水の来ない所(陸域)で育つ。ただし、1971年の河川工事で環境が変わったので、つる草や雑草がはびこるようになった。これは仕方のないことで、このつる草を退治する方法を考えなくてはいい、となる。

(4) 水域のヨシと陸域のヨシ

筆葉用ヨシは陸域のヨシ

筆葉用ヨシにとって水との関係をどうすれば良いのかについて、振り返っておきたい。

淀川環境委員会の報告を抜きだすと、2009年では「水条件の改善のみではヨシ群落

への回復は難しい」（2009年第24回淀川環境委員会）、2010年には「導水対策のその効果は十分ではない」とあります。NEXCOの4年余りの調査研究で「検討会」は、前述の様にヨシ原の中でも乾いたところでのしか筆築用ヨシは育たない、という結論でした。

「検討会」の委員でもある布谷知夫氏は、2014年の段階で「ヨシ原の面積を広げること、筆築用ヨシを守ることは相いれない。別にエリアを定めて筆築用に適した環境を整備するなど、次の手をうたないと先細りは明らかだと発言しています。（読売新聞2014年7月9日大阪本社版）また、この記事によればヨシ原の中の導水路が2012年にさらに広くヨシ原を流れる工事が行われ、以後「下流の鵜殿地区には、筆築に適したヨシが育っていない。細々とやってきたのに下流域の筆築用ヨシは壊滅状態だ。今年は上流側の上牧地区で筆築用ヨシ採取して数量を確保できた」（読売新聞2014年7月9日大阪本社版）

ヨシ原の下流側鵜殿地区にも水が流されるようになってからは、鵜殿地区では筆築用ヨシは採取出来なくなつたといっています。

昨年2019年4月に筑波大学で、筆築の蘆舌の葦材に関する研究を進めている筑波大学生命環境系の准教授である小幡谷英一氏とお会いし、研究の内容を教えてくださいました。そして「雅楽だより」59号、60号にその研究の成果の一端を書いていただきました。

筆築用ヨシとそれ以外のヨシの違いについて要点だけを抜き出してみると

「葦は竹と同様、非常に繁殖力が強い」

「鵜殿の葦なら何でも良いというわけではない」

「導水路の周辺は通水時に水に浸ります。

このような「水域」で育つ葦は、蘆舌には適していません」

「水に浸らない乾いた土地があります。蘆舌に使われるのは、このような陸域の葦です」

そして

「乾いたエリアでは、草本植物が葦よりも早く成長したり、つる性の植物が葦を引き倒したりして、葦が成長するのを邪魔します。

その結果、鵜殿の一部のエリアでは、葦が完全に駆逐され、草本植物に占拠されています。

したがって「蘆舌用の葦を守ること」と「葦原を守ること」を分けて考える必要があります。

どんな葦でも良いなら、水を引けば葦が育ちます。しかし、蘆舌用の「陸域の葦」を守るうとするなら、他の植物の侵入や繁茂を防ぐ努力をしなければなりません。

筆築や雅楽を守りたいなら、葦原と蘆舌用葦を混同せず、冷静に議論する必要があります」と書いています。

（「雅楽だより」59号2019年10月号『蘆舌用葦材の物性』）

淀川環境委員会の報告、「検討会」の報告、小幡谷氏の研究成果を読み、また実際にヨシ原の様子を見てみると、「ヨシ一般を守る」と

「筆築用ヨシを守る」ことは全く逆の対策を取らないといけないということを実感するのでした。

すなわち私が今まで「ヨシを増やせば、太いヨシも生えてその中から筆築用ヨシも増えてくる」という思い込みは間違っていたという事です。この間

違いを正していかな

いと筆築用ヨシの保

存も再生もできない

ということでした。

（以下 次号へ続く）

